

プレスリリース

新プロジェクト CHANGE 始動！

～共創の場形成支援プログラム COI-NEXT～

- 文科省/JST による「共創の場形成支援プログラム COI-NEXT（共創分野・本格型）」に採択された「レジリエント健康長寿社会の実現を先導するグローバルエコシステム形成拠点」の呼称が“CHANGE”と決まった。
- 拠点カラーは、看護職の人に対する優しさを醸し出すアプリコットオレンジ。
- ロゴも決定。拠点カラーで描かれた CHANGE に工学をイメージした T を重ねたデザイン。
- キックオフシンポジウムを 3/27 に開催する。

報道関係者 各位

平素は大変お世話になりましてありがとうございます。

公益財団法人川崎市産業振興財団 ナノ医療イノベーションセンター（センター長：片岡一則、所在地：川崎市川崎区殿町、略称：iCONM）は、同センターが中核拠点を務める COI-NEXT 「**レジリエント健康長寿社会の実現を先導するグローバルエコシステム形成拠点**」について呼称を CHANGE、拠点カラーをアプリコットオレンジと定め、以下のとおりに拠点ロゴを設けました。



COI-NEXT が謳う「人が変わる。社会が変わる。大学が変わる」というキャッチフレーズを基盤とし、CHANGEのCにTを重ねるとCHANGEになるという C to G with Ts を表しています。本ロゴにおいては、新たな夜明けとして海面に昇るアプリコットオレンジ（看護の暖かさ）の CHANGE に工学のトーンで描いた T を重ねたデザインとなっています。

CHANCE（好機）を捉え、優れた **T**echnology（技術）と **T**alent（人材）に加えて、多様性に対する **T**olerability（寛容性）そして **T**houghtfulness（思いやり）をもって社会に **CHANCE**（変革）をもたらす活動を私たちは行います。

プロジェクト CHANGE は、文部科学省/JST による「令和 4 年度共創の場形成支援プログラム COI-NEXT」（共創分野・本格型）に川崎市産業振興財団（理事長：三浦 淳、所在地：川崎市幸区、略称：KIIP）が代表機関となり申請し、2022 年 10 月 25 日に採択が決まった研究開発プロジェクトです。少子高齢化に伴うケア人材の未充足に着目し、医師・看護師でなくても誰もが家で簡便に使える、例えば、新型コロナ患者の在宅療養で不可欠なものとなったパルスオキシメーターのような検査機器を最先端の科学技術を駆使して創出し、並行して市民のケアマインドとケアリテラシーを醸成することで、家族による看護の質を高めることが狙いです。また、研究者の興味や思考だけで研究が進み、ユーザー（例えば市民や看護師）のニーズとかけ離れることのないように、研究途上でも交流イベントなどを通して研究内容に共感を得る機会を設けます。2023 年 3 月 27 日に開催予定の CHANGE キックオフシンポジウム（ハイブリッド開催の予定）では、プロジェクト CHANGE の概要と研究開発テーマの紹介に続けて、将来を担う若手の看護師や現役高校生と CHANGE 研究者の間で行われたワークショップの結果を公開するとともに、パネルディスカッションを開催し、将来の看護のあり方について議論を深める予定です。

PL・副PL・研究テーマリーダー紹介



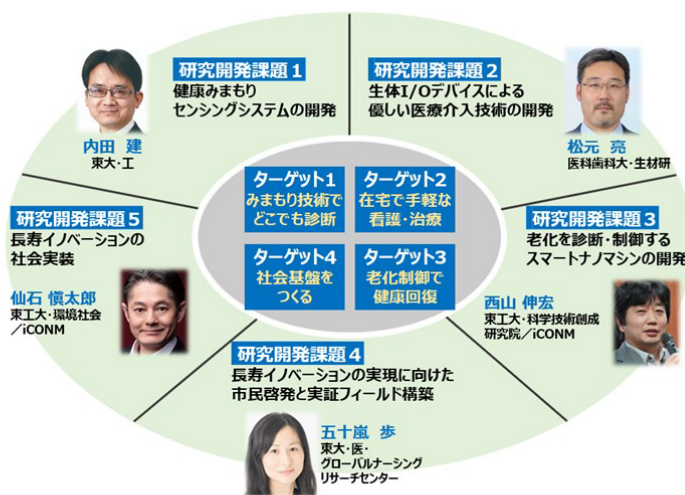
プロジェクトリーダー
一木隆範 博士（工学）
 東京大学卒。東洋大学工学部助教授、東京大学大学院工学系研究科准教授を経て2016年より同研究科教授。iCONMには2015年から主幹研究員として従事し、現職は研究統括。



副プロジェクトリーダー（総括）
永井浩二 博士（農学）
 名古屋大学卒。製薬企業の研究部門でキャリアを積み、研究所長も務める。2019年5月より、iCONMに勤務。研究推進チーフコーディネーターとして従事し、現職は副センター長。



副プロジェクトリーダー（連携推進）
島崎 真 博士（薬学）
 東京薬科大学卒。製薬企業の研究部門、広報部門でキャリアを積み、執行役員も務める。2019年5月より、iCONMに勤務。コミュニケーションオフィサーとして従事し、現職はコミュニケーションマネージャー。



研究開発課題 1（リーダー：東京大学大学院工学系研究科 内田 建 教授）：

現在、血液検査をはじめ、医療機関に出向かなくてはできない検査は少なくありません。研究開発課題 1 では、そういった検査をできる限り在宅でできるようダウンサイジングし、非侵襲的手法（例えば採血に代わる生化学的検査など）にするための研究を進めます。さらには家庭で普通に日常生活を過ご

す間に、居室に設置されたセンサー（例えば呼気中の微量成分を検出するセンサー）が健康状態をチェックできる仕組みを開発します。

研究開発課題 2（リーダー：東京医科歯科大学 松元 亮 研究教授）：

患者の病状にあわせた投薬管理は臨床薬学上重要ですが、在宅においては容易なことではありません。体液中にある特定のバイオマーカーを測定すると同時に、その値に応じた適切な量で薬剤を自動投与できる貼付式の薬剤血中濃度管理装置を開発することで、在宅における投薬管理の適正化を図ります。また吸入や貼付で投薬可能なバイオ医薬品製剤を開発し、医療機関に出向かなくても在宅医療で使用できるようにします。

研究開発課題 3（リーダー：東京工業大学科学技術創成研究院 西山伸宏 教授）：

老化の予兆に関する研究が近年活発に行われており、そのメカニズムが次第に解明されつつあります。これらの知見を基に、体内での老化の予兆を早期に発見する診断法を開発することで、サルコペニアなどの加齢性疾患を予防します。また、体内に発生した老化細胞をターゲットとした治療技術やワクチンを開発し、老化の進行を遅らせることで健康寿命の延伸に繋がります。

研究開発課題 4（リーダー：東京大学大学院医学系研究科・グローバルナースングリサーチセンター 五十嵐 歩 准教授）：

病院とは異なり、在宅医療では看護師が 24 時間患者に寄り添うことはできません。看護師に代わり家族を含む一般市民が看護に携わるための知識と理解力（ケアリテラシー）の醸成を行う学習ツールやシステムを開発し、本拠点の研究推進機構との連携の下、それを実践します。また、本拠点の研究室で創出された研究成果を実社会で実証する場の構築を、川崎市看護協会や川崎市立看護大学、総合川崎臨港病院の協力のもとで行います。

研究開発課題 5（リーダー：東京工業大学環境・社会理工学院 仙石慎太郎 教授）：

イノベーションが創出されても、今の制度や倫理感とそぐわないことが多々あります。本拠点プログラムで実施される研究の成果がスムーズに社会実装されるためには、それらを見越した制度改革と倫理的側面からの考察を識者とともに検討し、リフレクションペーパーとしてまとめておくことが必要となります。研究課題 5 では、社会科学的な観点からプログラム全体を俯瞰し、将来的に必要となるアイテムを国立医薬品食品衛生研究所など Transrational Research に経験豊富な機関と連携して準備する役割を担います。

共創の場形成支援プログラム (COI-NEXT) について

大学等が中心となって 未来のあるべき社会像（拠点ビジョン）を策定し、その実現に向けた研究開発を推進するとともに、プロジェクト終了後も、持続的に成果を創出する自立した産学官共創拠点の形成を目指す産学連携プログラム。J S T の既存の拠点形成型プログラムの 1 つである、センター・オブ・イノベーション（COI）プログラムがコンセプトとして掲げる「ビジョン主導・バックキャスト型研究開発」を基軸とした制度設計を行ったことから、本プログラムの愛称を「COI-NEXT」ともいいます。知と人材の集積拠点である大学等のイノベーション創造への役割が増している中、これまでの改革により、大学等のガバナンスとイノベーション創出力の強化が図られてきました。今後、「ウイズ/ポストコロナ」の社会像を世界中が模索する中、我が国が、現在そして将来直面する課題を解決し、世界に伍して競争を行うためには、将来の不確実性や知識集約型社会に対応したイノベーション・エコシ

テムを「組織」対「組織」の産学官の共創（産学官共創）により構築することが必要となります。

<https://www.jst.go.jp/pf/platform/outline.html>

ナノ医療イノベーションセンターについて

ナノ医療イノベーションセンター（iCONM）は、キングスカイフロントにおけるライフサイエンス分野の拠点形成の核となる先導的な施設として、川崎市の依頼により、公益財団法人川崎市産業振興財団が、事業者兼提案者として国の施策を活用し、平成 27 年 4 月より運営を開始しました。有機合成・微細加工から前臨床試験までの研究開発を一気通貫で行うことが可能な最先端の設備と 実験機器を備え、産学官・医工連携によるオープンイノベーションを推進することを目的に設計された、世界でも類を見ない非常にユニークな研究施設です。

<https://iconm.kawasaki-net.ne.jp/>

2022 年 12 月 21 日